

記憶で紡ぐ千葉市の歴史

千葉市オーラルヒストリー

千葉銀座通り 編



千葉市

活気に満ちた吾妻町界隈の思い出

植草 一男氏

— 植草さんの自己紹介をお願いします。

大正13年（1924）年1月3日に、千葉神社の近くにあった植草洋品店の長男として院内町で生まれました。今年（令和3年1月3日）で満97歳になりました。太平洋戦争では軍隊に行き、自宅は空襲で焼けました。焼野原の中で吾妻町二丁目（現・中央



植草 一男氏

区中央三丁目）に植草洋品店を開業し、今は千葉みなどの老人ホームで生活しています。大正の時代に千葉に生まれ、百歳近くまで千葉の中心地で生活している人はごく少なくなったと思います。

— 小さいころ、町の雰囲気はどのような感じでしたか。

昔の院内の店の前に陸軍の憲兵隊があつて、馬に乗っている憲兵を毎日見ていました。憲兵とは軍隊の警察のようなものです。そうかといって、物々しい雰囲気ではなかったね。

千葉劇場と勉強堂がある辺りを「蓮池」と言っていました。蓮池というのは町名ではありません。俗にあの辺一带を蓮池と言っているだけで、中央区蓮池という法的な地名はないんです。私の母が言っていたんだけど、明治40年、つまり明治の終わりにくらしには、勉強堂がある辺りに小さいけど蓮の池が残っていたさうです。それで、「今日は蓮池で遊んでいたよ」と言っていたことから、蓮池という呼び名がついたというのかな。江戸の終わりから明治にかけては、あの辺りには人があまり住んでいなかったんだよね。人が多く住むようになったのは明治の終わりで、大正時代に商店、飲食店が急増して、千葉の中心繁華街になったんですね。

— 蓮池は花街だったと伺っています。

吾妻町（現・中央区中央二、三丁目）には料理屋が多かったので、

芸者がいて、置屋がありました。置屋は芸者を何人か置いておいて、料理屋から芸者を派遣してくださいと言われると、はいと言って送り出す。どこでも少なければ1人、多くて3、4人くらいの芸者を置いていましたね。

今では会議、懇親会などでホテルを使いますが、昔はホテルは小さくて宿泊が中心でした。大勢集まるのは大座敷のある料理屋だったのです。植草洋品店は見番（芸者の取次ぎ、稽古場）の前だったので、芸者の白足袋は千葉で一箱売れたと思います。

——子どものころはどんな風に遊んでいましたか。

あまり遊んだ覚えがないね。働いた覚えはあるんだけど（笑）。洋品店の長男だから、小学一年生のときから家の手伝いをやらさ



上／縦の通りは現在のきぼーる通り。中央横の通りは吾妻町通り。左側の大きな建物は割烹梅松館（大正昭和の頃）
右／梅松横丁。昔の梅松館の跡地（現・きぼーる駐車場付近）は、バーや飲食店、カフェーなどで賑わった（昭和10年代）

れていました。昔は鉄のお釜でご飯を炊いていましたからね。そうすると燃料を燃やすでしょ。私の家は洋品店だから、送られてくる木の箱やポール箱が燃料なんです。それで、お釜にお米を研いで入れて、火をつけて燃やして、ご飯ができるとプーって煙が出てきて、ここまで来たら火を止めるんだよ、と親から教わる。それが小学校一年生のときなんです。だから、何をして遊んだという記憶がないのね。かくれんぼ、田んぼの魚とり、蟬とりかな。店は忙しかったと思いますよ。私の親が店を始めたのが大正の終わりごろ。そのころ衣料品を売る洋品店という名前の店は、私のところのほかに千葉市に2、3軒しかなかったんです。伊丸屋さんとか井筒屋さんとか。

いまの千葉市を知る人には理解が難しいかもしれないけれど、大正時代は本町通りと葭川の間くらいしか町がなかったんです。本町小学校から東の方はずっと後でできた町。それから現在の千葉駅の辺りは、私が千葉商業へ通う頃はまだ原っぱだったんです。千葉神社に近い自宅から松波町の千葉商業に歩いて通ったんだけど、いまの千葉駅の辺りには家はポツンポツンとしかなくて、豚小屋や鶏小屋、麦畑があったんです。機関車の車庫を機関庫と言って、いまの千葉駅がある位置にありました。その機関庫の脇を通って千葉商業まで通ったという記憶があります。その辺りのことを知っているのは、もう私くらいしかいないですね。

——兵隊に行かれるまでは、どのように過ごされていましたか。

私は絵を描くのが好きでした。千葉商業に通っていた昭和15(1940)年当時、全国商業美術展という展覧会が年に一回開かれていました。全国というのは樺太、千島列島、朝鮮半島、それから台湾も日本でした。その展覧会に、「八紘一字」という題でポスターを応募しました。「八紘一字」とは、日本はアジアの盟主である、日本の周り四方八方は一体である、ということの意味する言葉です。それで、私の作品が一位になりました。確か第二位が奉天商業だと思えます。奉天というのは朝鮮半島の奥の、昔満州と言っていた場所で、いまは中国なんですよ。まだそこも日本の支配だった。その当時は、日本といえば極東アジアと言ってもいいくらい広がったんですよ。

そういうことで、周りから、上野の東京美術学校、いまの東京藝術大学に行きなさいよ、と言われたことはあります。三越と並ぶ日本でも超一流の高級百貨店である日本橋高島屋から声がかかって、その宣伝部に採用されることになりました。だけど、千葉商業を卒業するところに、うちの支店を任されていたおじが軍隊に召集されてしまった。そうすると、店をやる人がいないから、「一男は高島屋さんに勤めるのをお断りして、うちの店をやれ」ということになって、私は千葉商業を卒業すると、自分の店をやることになりました。支店は、いまきぼーるがあるところの勉強堂の向かい側で、店長をやっていました。そこは千葉で一番の繁華街でした。

——太平洋戦争では徴用されましたね。

昭和16(1941)年12月8日、ラジオが「臨時ニュースを申し上げます」と言って、日本の海軍がハワイを攻撃したと放送しました。それから第二次世界大戦、太平洋戦争が始まったんですね。だから、太平洋戦争が始まったとき、私は吾妻町の支店にいたんだけど、そのほんの数カ月後には徴用で船橋の工場へ行くことになりました。いまでもありますが、日本建鉄という会社に入って、ゼロ戦と呼ばれる海軍の戦闘機を作っていました。

日本建鉄では3年くらい工場勤めをやっていました。その間に20歳になりました。日本の男子は20歳になると徴兵検査を受けて、特に異常がなければみんな兵隊に行くことになっていました。とにかく20歳になったら徴兵検査。検査で体が悪くなければ兵隊と決まっていたんだよ。

2年間現役の兵隊勤めを終えると22歳かな。「じゃあそろそろ嫁さんを見つけなきゃね」と言われました。日本人の男は22歳くらいを過ぎると嫁さんだよ、女の子も20歳を過ぎれば嫁さんだよというのが世間一般の習慣だったんです。

——戦後千葉市に戻られると、まちは焼野原だったと伺いました。

私が兵隊に行っている間に千葉市は確か3回くらい空襲を受けただよね。3回目の7月7日、俗に七夕空襲といわれている空



旧千葉銀行本店（現・千葉中央ツインビル1号館）屋上から。
通りの正面は旧国鉄千葉駅（現市民会館）

昭和 21（1946）年

襲で、千葉市は完全に丸焼けになりました。そのとき、私は三重県松坂市の軍隊にいましたから、新聞で千葉が空襲で焼けたということは知っていました。8月15日に終戦になり軍隊がなくなつて、米一升をもらつて軍服のまま部隊を出しましたが、鉄道が不通。米一升で民家に泊めてもらい、三日くらいかかつて8月22日に千葉へ帰ってきました。すると、千葉駅は燃えないで残っていました。というのは、駅は周りに燃えるものがないのね。駅前広場っていうのはテニスコートが三つ四つ入るくらいの広場があるでしょ。後ろも線路が走つたりしているから、駅の周りはあまり燃えるものがない。周りは全部燃えちゃったけど、千葉駅は燃えなかったんですね。珍しいなと思いますけどね。

昔の千葉駅はいまの市民会館の辺りにあつたんですよ。そこから見ると、亥鼻山まで何にもなかった。あつたのは石の鳥居と石の灯籠とか墓石。石は燃えないでしょ。あとは、直径50センチとか1mくらいある抱え込むような大きい木が、全部焼けて真っ黒こげになつてポンポンと残ってはいくらいい。石と土蔵くらいは残っていたけど、燃えるものはみんな燃えちゃった。緑り

返すけど、千葉駅から眺めると亥鼻山まではスポンと何もなくて見えたということですね。後で気が付くとね、昔三菱銀行だった千葉市美術館は石の建物だから、あれは燃えなかったんだね。それぐらいしか残っているものはないの。空襲で千葉市は全焼したんです。

兵隊から帰ってきたけど、米も食うものも何もない。当時は配給というのがあつて、米とかサツマイモも配給でした。一人何キロつていったかな。だけどそれだけじゃ足りないわけ。だから今度はどこかへ探しに行くんです。加曾利貝塚から先は、まだ農村地帯だから焼けなかったんですよ。千葉刑務所から四街道方面に向いた東の方は焼けなかった。だから刑務所の先の方までリュックサックを背負つて、買い出しに行きました。自分が食う米とか芋とか、腹に入るものならなんでもいい。いまの人には想像がつかないと思うね。

——物が全然ない中で、お店を再開されたのですね。

昭和21（1945）年の7月に、親の援助を受けて吾妻町二丁目に店を開業しました。私の店は洋品店だったんだけど、店の商品は米や芋、野菜、魚、もう何でも売りましたよ。生活の糧として、洋品店だから衣料品じゃなきゃなんていうことは全然ない。そういつた中で、埼玉まで行って米を買ったんです。米を買うのに埼玉まで行くんですよ。そうしないと腹に米がはいらない。埼玉ま



手前の建物は奈良屋千葉店。銀座通りは買い物客で賑わっていた昭和39（1964）年頃

でリュックを持って行って、なるべくいっぱいと思ってリュックに入れたけど、今度は立ち上がれなかった（笑）。リュックいっぱいっていうとね、米俵の半分以上入っちゃうから、結構な重さでしょ。欲張ってたくさんリュックに米を入れたけど、重くて立てなかったっけな、ということをおぼえていますよ。

——商店街の復興も早かったのでしょうか。

いまの千葉銀座通りときぼーるの前を通る道が、昔からの千葉市の中心商店街なの。だから、復興となるとあの辺りを中心に昭和22（1947）年に商店が店を作り出して、「千葉銀座」という通りの名前がつけました。東京の銀座にあこがれたのです。

復興の勢いはすごかったね。

とにかく売れて売れて、もういよいよっていうくらい売れました。朝の8時半か9時くらいに店を開けて、夜8時くらいに閉める。だいたい12時間くらい販売してましたね。売れば商店だったら誰だって面白いから、お休みというのはいくもなくて、ひと月の30日、毎日店を

やっていました。そうしたら商工会議所から連絡があつて、「国から商店もひと月に一回は休みなさいと言われたので、銀座通りの皆さんもひと月に一回は休むように」と言われたんです。それで、第三水曜日が商店のお休みになりました。

昭和37（1962）年頃、千葉市か県か分からないけど、千葉銀座通りを一日何人通るのか調査したんです。確か私の記憶では、ピークの一日の通行量が5万人でした。ひしめいてますよ。押すな押すなっていうくらい人があふれたの。当時の植草洋品店の写真があるけど、店の中に入りきらないで、外に5人、10人くらいのお客さんが並んでいますよ。嘘ついてるみたいでしょ。とにかく、そのくらいすごかったんです。どこのお店もね。

——映画館やデパートなどもたくさんあったそうですね。

そう。娯楽は千葉銀座の吾妻町に行くという雰囲気でしたね。いまは43階のビルになっている場所に、奈良屋というデパートがありました。奈良屋というのは京都でも金持ちの呉服屋で、それが大正の終わりか昭和の初めごろに千葉にお店を出しました。いまの千葉劇場の向かい側辺りに、奈良屋という鉄筋3階建ての建物がありました。当時は平屋の木造が普通だから、鉄筋3階建てというのは豪華建築だったんですよ。それが大きくなってセントラルプラザになり、その跡地にいま、43階のビルが建っています。千葉銀座通りが千葉の中心商店街だからイベントも多くて、な

にか市の催しがあるとあそこを通っていたね。

——ほかに、千葉銀座の思い出はありますか。

今考えると、いろいろやってきたね。千葉劇場の30メートル離れたところに、吾妻町二丁目民会館があつて、そこに子ども神輿が入っています。私が町会長をしていたころの昭和57（1982）年、東京電力の変電所ができると分かって、「町民会館を作りたいので、空いているところを使わせてもらえないか」という話を東京電力と話したら、いいですよと言われたので、あそこに二階建てで吾妻町二丁目民会館を作りました。

「千葉銀座」という通りの名前を付けたのも、言い出したのは私です。東京の銀座というところとあかがれですよ。千葉の田舎者の人間からすると、東京の銀座に店を出したんだと言うと、すごいなということになるでしょ。「銀座」という言葉は、私たち商人からすればやっぱりあかがれです。あそこの商店街に千葉銀座って名前をつけようよと提案しました。それでみんながいいじゃないのということになって、千葉銀座となったんです。

その当時は焼け野原からの復興の最中。だからみんなの考え方が先へ先へと向かっていたんだね。だけど、小売りでいまも店を続けているのは2軒しかありません。福井というおせんべい屋さん、中央公園の千葉メガネという眼鏡屋さん。今は昔のような小売業の集まった商店街は淋しくなり、飲食業の多いまちになり

ました。テレビで商品の紹介をする時代になったんですね。私はあと3年で100歳になります。千葉市でも私より古い人はそんなにはいないでしょう。いたとしても、千葉の昔話をそんなに語れる人はいないと思います。だからいま、このまちの記憶を大切に残しておきたいですね。

千葉市オーラルヒストリー

千葉銀座通り 編

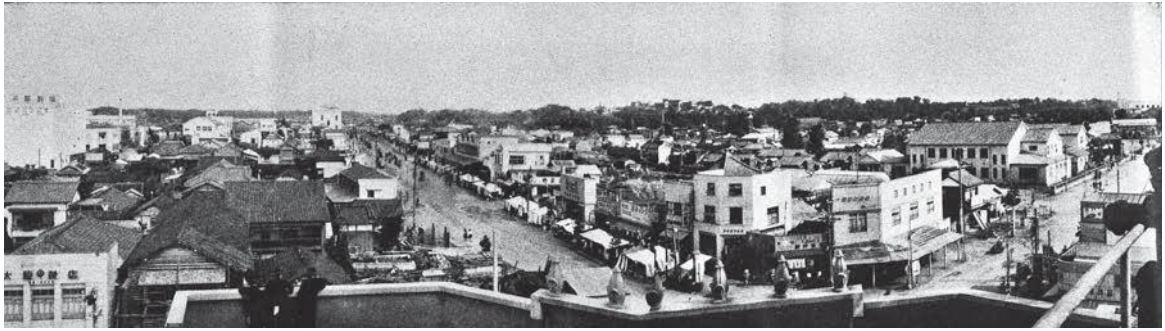
発行／千葉市中央図書館

発行日／令和3年3月31日

取材日／令和3年3月12日

資料提供／植草一男氏、伊原茂久氏（表紙：大賀一郎博士）、
中西文明氏（表紙：大賀ハス、記念碑）

参考文献／『千葉吾妻町物語』



戦災より復興した商店街。奈良屋千葉店の屋上から南東方面を望む。建物が密集し、道路沿いに露店が並んでいる
峰庫治『観光千葉』



銀座通りの七夕。空襲の記憶を癒す、商店街を彩る七夕の飾り。夜には広場で盆踊り大会も開かれた
昭和 33 (1958) 年頃



吾妻町通り。鈴木写真館と千葉貯蓄銀行付近。露店が軒を連ねていた
昭和 5 (1930) 年頃
『千葉写真大観』



昭和 31 (1956) 年の七五三 (撮影/植草一男氏)



昭和 35 (1960) 年の妙見大祭。その太鼓の音から別名「だんだら祭り」として知られる



昭和 34 (1959) 年の千葉不動尊御本尊開眼式における稚児行列 (撮影/植草一男氏)